

## 日本海軍の良き伝統を引き継ぐ海上自衛隊 (今も残る日本海軍の教え 10 選)

フリーWEB 塾「郷什塾」塾長です。

レポートをダウンロードしていただき有難うございます。

今回のレポートは、多忙なお仕事のコーヒータイトにでも気楽に読んでいただき、日頃のお仕事の参考にしていただければ幸甚・・・と思って公開したものです。

海上自衛隊が今でも大事に継承している旧日本海軍の教えと精神は数多くあります。

これらは全て、和と勤勉を信条とする日本人の組織力、チーム力を発揮するための日本古来からの教えでもあり、

海上自衛隊のみならず日本の民間企業にもそのまま適用できるものです。

本レポートでは、海上自衛隊が今も継承する日本海軍の教え 10 選として次を紹介します。

### ① 合戦準備

海上自衛隊の護衛艦は戦闘態勢への移行準備の号令として「合戦準備 (かつせんじゅんぴ)」の号令を下令しています。どうして今どき「合戦準備」なのかを紹介します。

### ② 5分前の精神

5分前の精神は広く知られていますが、この5分前という概念がどのような経緯で誕生し、どのような教えとして残っているのかを紹介します。

### ③ 出船の精神

出船の精神とは何か、何故この精神を大事にしているのかを紹介します。

### ④ ヨーソロの精神

ヨーソロとは何か？ ヨーソロの起源と教えについて紹介します。

### ⑤ 五省

海軍兵学校で始まり、海上自衛隊に今でも継承されている「五省」についてその意味と実践の現状について紹介します。

### ⑥ 部下統率法

人を動かす部下統率の極意として海上自衛隊に継承されている海軍の教えについて紹介します。

⑦ 士気高揚のための基本要素

海上自衛隊が継承している海軍式士気高揚策について紹介します。

⑧ 男の修行

階級、指揮命令系統が厳正な海軍における人生訓としての教えを紹介します。

⑨ 海軍士官である前に紳士たれ

明治維新により誕生した日本海軍創設以来の教えである「海軍士官である前に紳士たれ」についてその起源と教えについて紹介します。

⑩ 初級士官心得

三等海尉（少尉）及び二等海尉（中尉）の若い初級士官が勤務遂行上の心得として今も実践する約 35 ヶ条に及ぶ海軍の心得について紹介します。

## 1 「合戦準備」

海上自衛隊の護衛艦は戦闘準備の作業を開始する号令として「合戦準備（かつせんじゅんび）」を使っています。

艦の一般公開等において、海上自衛隊の護衛艦は、戦闘準備の号令として旧海軍からの「合戦準備（かつせんじゅんび）」という号令詞を使っています。と紹介すると、

10 人中 10 人がコンピューター・ミサイル戦の時代に「合戦（かつせん）」ですかと一様に驚かれます。

私が、平成 17 年に海上自衛隊の全護衛艦と艦長の教育指導を担当する海上訓練指導隊群司令の配置にあった時、

「合戦準備」は現代の戦闘様相に相応しくない言葉であり、「戦闘準備」という用語に改めようという議論が起きました。

勿論、私は反対しました。

当時の海上自衛隊の教育界では「戦闘準備」の意見が多かったが、多くの主要幹部の意見も踏まえ、「合戦準備」は今でも生き残っています。

よって、最先端のイージス艦でも「合戦準備」という号令が戦闘態勢につく準備号令として使われています。

北朝鮮の弾道ミサイル警戒に出動するイージス艦も、破壊措置命令ができれば「合戦準備」が艦内に流れ戦闘準備を整えることになります。

この「合戦準備」という号令がかかると、服装を正し、心を正し、身命を賭して国を守る決意と覚悟が生じたものです。

「・・・合戦」「・・・戦い」「・・・役」「・・・変」「・・・紛争」「・・・戦争」等々、戦いの形式によって呼び方が異なりますが、ここではこれらの定義づけはしません。

「・・・合戦」と言えば、

両軍が向かい合い、合図で始まる戦（いくさ）であり、指揮官先頭の両軍の大將が馬で進み出て、「やあやあ、われこそは・・・国の・・・でござる。」と名乗りをあげ、

お互い大義を言い合い、あるいは相手をののしり合い、そして最後に「かかれ」の合図で戦（いくさ）が始まる。

また、敵の大將に要求されれば大將同士の一騎打ちもあります。

このように先手、後手、だまし討ちのない正々堂々とした戦（いくさ）が合戦です。

この観点から見ると、精神を統一したり、相手を威嚇したり、自分を鼓舞する「しきり」があり、「はっけ よーい のこった」の合図で始まる相撲も合戦の型であると言えます。

海上自衛隊での勤務中、米海軍や多くの国の海軍軍人と友人になり、家族同士の付き合いでキャンプに行ったり、大酒を酌み交わしたりして分かったことがあります。

どこの国の海軍士官も、トラファルガーからミッドウェー、フォークランドまで古代から現代までの海戦、戦史を深く勉強しています。

その中で他国の海軍士官が褒め称えるのは日本海海戦やマレー沖海戦の日本海軍の見事な作戦と戦闘に勝利した後の破れた敵兵に対する姿勢、処遇、すなわち武士道精神です。

この「合戦準備」という号令には、お互い海を守る Navy Family であるが、国の命運を賭けて正々堂々と戦おう。という武士道精神を呼び起こす不思議な力があります。

日本海軍が大東亜戦争における海戦で残した武士道精神は枚挙に暇はありませんが、大東亜戦争開戦劈頭のマレー沖海戦等、特に破れた敵部隊、敵兵に対して示した武士道精神は誇れるものが多いです。

## 2 「五分前の精神」

一般社会においても「時間厳守」という意味で「五分前の精神」という言葉が使われます。

海上自衛隊においては、集合、訓練、作戦の開始等の五分前にはあらゆる準備を整えて定時には 100%の力が発揮できる態勢とする精神が定着しています。

### ■ そもそも五分前の考え方の起源は为什么呢？

五分前とは、例えば「起床五分前」「課業始め五分前」「巡検五分前」「訓練開始五分前」等の号令に使用する五分前です。

この五分前は古くは海軍だけで使われていました。

何故海軍は五分前を使っていたのでしょうか？

この五分前は、幕末の坂本龍馬でお馴染みの海軍操練所から明治の初期に日本海軍が誕生しましたが、当時の海軍軍艦の艦内には現在のような電話、無線、拡声器などの通信機器はなく、必要な命令、指示は伝令の口頭伝達で行われていました。

艦の出港に際して乗組員総員を配置につけるための号令「出港用意」は艦内全般に徹底が必要であり、艦長付きの伝令が艦内を回り口頭で伝えました。

当時、伝令が艦内を一巡するのに約五分を要したことから、重要な作業、行事の五分前を予告するようになったと言われています。

これが五分前の起源です。

また、五分前という時間は、作業の開始準備を整えるのに適当な時間であり、

仕事を行う場合に、五分前に全力を発揮できる体制を整え、

定時になったら直ちに全力を発揮して作業を開始するという「五分前の精神」が定着したとされています。

■ 五分前の精神には次のような意義があります。

① 五分前の精神を実践するためには、周到な事前の準備を行って待機しておかなければなりません。

そして、その準備には作業に関わる人の作業手順の理解、うまく進行しない場合の代替案の準備や健康管理や心の準備等の心身の準備までも含み、

作業が大きくなればなるほどその準備を万全に行っておく必要があります。

② 臨機応変の即応態勢が構築できます。

五分前の精神とは、常に有事即応の態勢であれ、ということにも通じます。

千変万化の海上における海軍作戦は、状況が容易に変化するため、あらゆる腹案、代案を考えておかなければなりません。

作戦方針、行動方針は状況の変化に応じて臨機に変更しなければならないことが容易に生じます。

このように、海軍作戦は新たな方針、行動に対しても全力を集中できる即応態勢の構築が不可欠であり、五分前の精神が重要となります。

③ 五分前の精神が定着した部隊には次のような効果が顕著となります。

まず、第1に、指揮官のみならず全員がそれぞれの持ち場で全力を発揮するための十分な事前準備（研究）を行う習慣が付き、それぞれが自分の立場と使命を認識できるようになります。

その結果、チームの結束と強化が図れ、作業が一斉にスタートでき、チームの高い総合力を発揮できるようになります。

### 3 「出船の精神」

一般社会においても玄関では靴を外向きに揃えます。

海上自衛隊の護衛艦の入港においては、特別な行事、あるいは急患輸送等速やかに時間を短縮して岸壁に横付ける必要がある場合は、入港進路のまま直進して艦首を陸側に横付けます。

これを入船入港といいます。

通常は、次回の出港が迅速にできるように艦首を海側にして横付けます。

これを出船入港といいます。

海上自衛隊の艦長の表芸と良く言われるのが港での出入港です。

特に長期航海を終えて入港する場合は、早く入港(岸壁横付け)して乗組員を早く上陸させたいものです。

しかしながら、海上自衛隊においては入港時間の短縮より、回りの迅速な出港を重視します。

すなわち、即応態勢維持のため、旧海軍から受け継ぐ船乗り精神は出船入港です。

出船入港は岸壁の沖で反転し後進で下がるか、または奥から回り込まなければならず、操艦も難しく、時間もかかります。

しかし、出船係留であれば、緊急時は例え曳船がなくても自力で迅速に出港できます。

入船の場合はよっぽど風向きが良くないかぎり自力で出港することはできません。



上の写真は海上自衛隊横須賀地方総監部の吉倉岸壁の係留状況です。

右側の DDH「いせ」は入船入港ですが、左の「いかづち」「はるさめ」は出船係留となっています。

「いせ」は造船所で就役後の行事のために横須賀に初入港したため出迎え行事等のために時間短縮と安全を期しての入船入港と思います。

私が横須賀地方総監部の防衛部長の時に、吉倉岸壁の陸側民有地には高層マンションがあり、

高層の住民から発電機の音と振動が煩いとの苦情があり、煙突の排気を海側に向ける入船係留を試験的实施したら騒音問題がなくなったことから、応急的な対策として入船入港を標準とした時期がありました。

これは、特異な事例であり、基本は出船の精神が綿々と受け継がれています。



また、上の写真は舞鶴地方総監部の A 岸壁の横付け状況です。

これも港の出口に向けた出船入港です。

舞鶴の場合は写真の右側から左に回り込んで写真のように出船係留します。

ただし、呉地方総監部の F バースや佐世保地方総監部の T 岸壁のように、岸壁の海側で後進入港のために反転する場所がフェリー等の輻輳する場所や岸壁付近の潮流が大きい場所は反転、後進の入港が危険であり止むを得ず入船入港としています。

下の写真は呉の F バースの入船入港です。





家庭の玄関でも靴を出口に向けて揃える、駐車場でバックで出口に向けて駐車することもまさに出船の精神であり、会社で1日の仕事を負えたら道具、資料を片付け、翌日に出勤後ただちに仕事を開始できるようにすることも出船の精神です。

#### 4 「ヨーソローの精神」

「ヨーソロー」とは操艦（船）号令の用語であり、波や風、潮の流れのある海の上を進路を正確に維持して（定針するという。）、真っ直ぐ進ませるための号令詞（指示）です。

この言葉には、日本の船乗り精神（シーマンシップ）が込められており、

船乗りは 左右にフラフラすることなく、信念を持ち、目標に向かって一所懸命に邁進せよという教えを込めた海軍精神であり、旧海軍から海上自衛隊に脈々と引き継がれています。

「ヨーソロー」の語源には幾つかの説があります。

代表的な説を紹介しますと、

① 幕末に蒸気船の操船術が日本に入ってきたとき、命令を出したあと「宜しく候」と付け加えたのが、「ヨーソロー」という語に訛ったという説

② 和船時代から既にあると言われていた言葉で、その発端は舵を向けて回頭している中途、「これにてもはや操舵は宜しゅう候、早速舵を戻して船を直進させ候らえ」から起ったという説

③ 「目標と船首と拙者 (表仕=おもてし。今で言う航海長)の3点がよう揃った！舵を中央に戻してよし！」ということから起こったという説

いずれの案も現在の海上自衛隊の操艦号令には生きています。

艦は千変万化する海上で、風や波や潮の影響を大きく受けて進みます。

舵をとる人が未熟だと艦は動揺し針路が安定しません。

よって、細心の注意を払って艦を真っ直ぐ進めることが最も重要であり、この精神を「ヨーソロの精神」といいます。

荒れ狂う海でも「ヨーソロ」の精神があれば、艦はフラフラすることなく、真っ直ぐ進みます。

このような状態を、艦が「波を切る」状態ともいいます。

何事も目標を達成するまでは、精神を集中して撃ち込まなければ立派な仕事を成し遂げることはできないという教えでもあります。

## 5 「五省」

海軍兵学校に始まり、海上自衛隊で今でも継承されている「五省」についてその意味と実践の現状について紹介します。

五省  
一、至誠に悖るなかりしか  
一、言行に恥づるなかりしか  
一、氣力に缺くるなかりしか  
一、努力に憾みなかりしか  
一、不精に亘るなかりしか



海軍兵学校からの伝統の「五省」は、広島県江田島市にある海上自衛隊幹部候補生学校に現在も伝わっています。

五省は昭和7年、第34代海軍兵学校長 松下元（はじめ）少将の発案により、

生徒各自の1日を反省させ明日の更なる修養に備えさせるため、5カ条の反省事項を考え生徒に実践させたものです。

海軍兵学校では、夜の自習時間の終了5分前に「自習止め5分前」のラッパが鳴ると、

生徒は自習を直ちに止め、使用していた書物を素早く机の中に収めて、姿勢を正します。

そして当日の当番生徒が五省の5項目の各項目を順番に問いかけ、その他の生徒は瞑目し、心の中でその問いに答えながら1日の自分の行為、姿勢を自省自戒していました。

海上自衛隊幹部候補生学校においては、この五省を現在でも引き継ぎ、夜の自習時間の終了5分前に海軍兵学校と同じ要領で行っています。

要領は、当直学生が五省の各項目を読み上げ、教室の全員が瞑目し1項目ずつ1日の反省、自戒を行います。

当直学生の読み上げ要領は、「ひとつ、至誠に悖るなかりしか。・・・ひとつ、言行に恥ずるなかりしか。・・・ひとつ、・・・」です。

ここで、五省の意味を簡単に説明します。

#### ① 至誠（しせい）に悖（もと）るなかりしか

日本国の海軍士官になるために高い志を持ってここ海軍兵学校に入校してきた。今日一日、誠意を尽くして生活できたか？

客観的に自分を振り返り不誠実と思われる振る舞いはなかったか。

真心に反することはなかったか？

#### ② 言行に恥ずるなかりしか

厳正な規律とチームワークが必須のまさに運命共同体の軍艦を基本とする海軍士官にとって嘘やごまかし、言い訳は最も恥ずべきこととして叱責されました。

多くの部下の命を預かる海軍士官は刻々と変化する情勢の中で健全な判断を瞬時に行わなければならない、

部下の全員がその指揮官に命を預けて自分の配置で全力を発揮できるのは表裏のない潔い指揮官のみです。

外連（けれん：かっこ良く見せること）や嘘、ごまかし、口だけの言行不一致は海軍士官の資質なしと厳しく叱責、制裁されました。

#### ③ 氣力に欠くるなかりしか

今日1日の行動を振り返り、氣力に欠けていることはなかったか。

氣迫に欠けるところはなかったか

④ 努力に憾(うら)み勿(な)かりしか

憾み(うらみ)とは他と比較して不満に思うことをいいます。

今日1日の自分の努力に反省はないか？

自分の限度まで努力したか？

易きに流されたことはなかったか？

⑤ 不精に互(わた)るなかりしか

服装、姿勢、身だしなみ、整理整頓等、頭のとっぺんから、つま先、身の回りまで、不精になってはいなかったか？

そしてこの「五省」は米海軍にも大きな影響を与えています。

昭和45年ごろ江田島の幹部候補生学校を訪問された米海軍第7艦隊司令官、ウィリアム・マック中将(のち海軍兵学校長)は五省に感銘を受けて英訳を募集しました。

そして日本人、松井康矩氏(76歳)の英訳が当選し、賞金1000ドルとともに英訳文が、メリーランド州のアナポリス海軍兵学校(United States Naval Academy)に掲示されたそうです。

~~~~~

至誠:Hast thou not gone against sincerity?

言行:Hast thou not felt ashamed of thy words and deeds?

気力:Hast thou not lacked vigor?

努力:Hast thou exerted all possible efforts?

不精:Hast thou not become slothful?

~~~~~

昭和60年頃には、ある米海軍士官が江田島の海上自衛隊幹部候補生学校を見学し、

五省について、米海軍の機関紙「プロシーディングス」に次のように寄稿しています。

-----

幹部候補生の訓練の激しさと規律の厳格さに強い印象を受けた。

この規律の根源は、五省を中心とする過去の豊かな遺産である。

腰の短剣は姿を消し、制服も完全に西欧風であるが、

日常生活は海軍兵学校生徒が鍛錬を積んだ 40 年前ときわめてよく似ている。

わずか 2 ヶ月前にはカナヅチだった候補生が夏の終わりには 8 マイル（約 15Km）の遠泳ができるようになる。

現在の海上自衛隊も旧海軍の良き伝統を引き継ぎ、高い精強性を維持しています。

## 6 「部下統率法」

海上自衛隊では部下統率の極意として、山元五十六元帥の「やってみせ 言って聞かせて させてみて 誉めてやらねば 人は動かじ」という言葉が良く引用されます。



### ◇やってみせ◇

ただ単に展示して見せることなく、正しい「模範」を示すことである。

このためには、相応の知識、経験、実力がなければ正しい「模範」を示すことはできない。したがって、常日頃から良く勉強して実力を身につけておかなければならない。

### ◇言って◇

ただ単に話すことなく、相手が理解できるように「説明」することであり、相手が理解できなければ「説明」したとは言えない。

そのためには、相手が理解できるように分かりやすく「説明」する必要がある。

### ◇聞かせて◇

これは相手に「納得」させることである。納得させるためには分かりやすく、繰り返し「説得」する必要がある。

人間は「納得」すると与えられた仕事に実力を発揮するものである。

#### ◇させて見て◇

これは実際に「体験」させる。ということである。

人間は頭の中で理論的には分かっているつもりでも実際やってみると思い通りには行かないものである。

#### ◇ほめてやらねば◇

これは、体験させて行かせたことに対して「評価して、良くできた場合は、褒めてやる。」ことである。

当然、良くなかった場合は、悪いところを直させて、激励して再度やらせる。

#### ◇人は動かじ◇

これは、単に行動することではなく、目的を達成するために自己の職責を良く認識して行動することである。

チームの中の一員として自分の役割を認識して全力を尽くすことを「一所懸命」という。

この言葉は、まさにその通りと誰もが納得できる内容であると思いますが、これを実行することは実は困難であり、部下を育てるには根気と愛情が重要であることを教えてくれています。

## 7 士気高揚のための基本要素

ここでは海上自衛隊が継承している海軍式士気高揚策について、項目のみ紹介します。

- ① 部下を知れ
- ② 部下の面倒を見よ
- ③ 部下と事を共にせよ
- ④ 自身で視察せよ
- ⑤ 部隊精神を啓発せよ

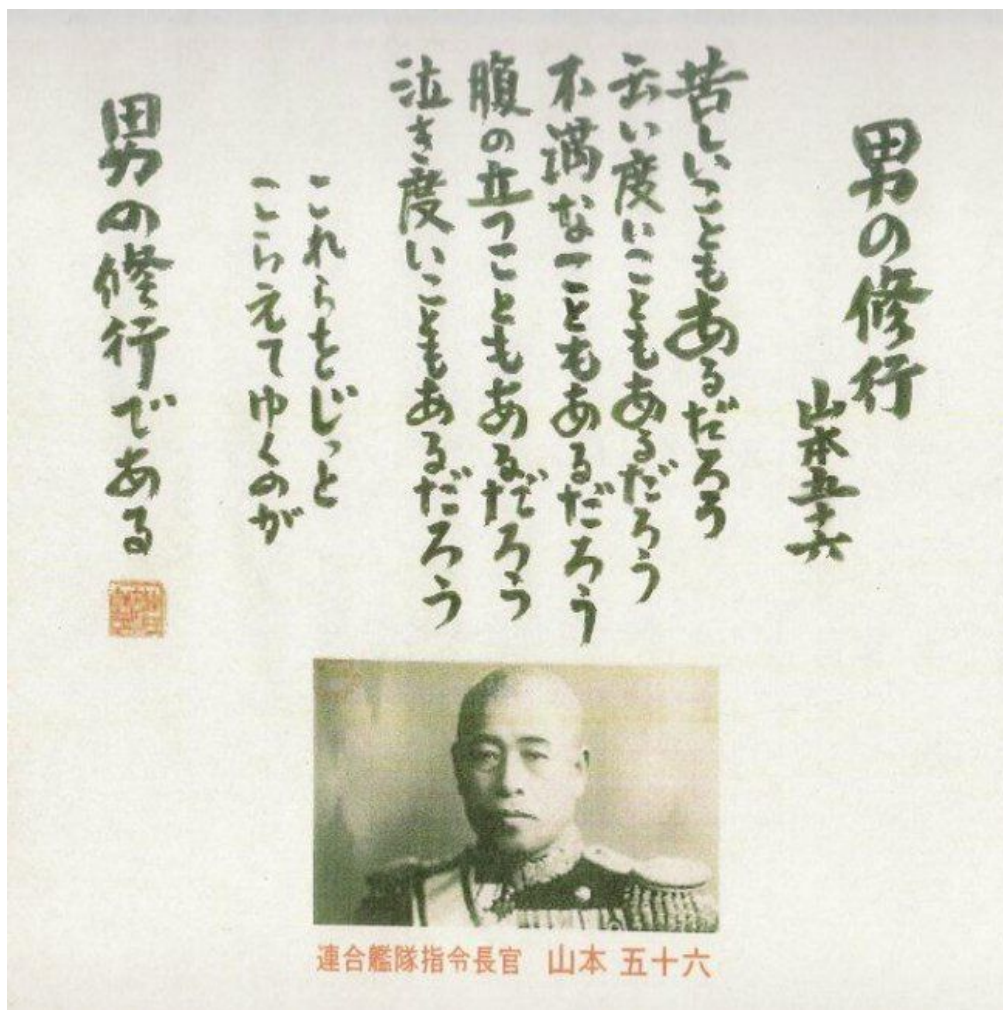
- ⑥ 責任を確立せよ
- ⑦ 部下を常に目の届くところにあらしめよ
- ⑧ 部下から知られ、そして、見られよ
- ⑨ 緊急点を分別せよ
- ⑩ 部下の仕事を知れ
- ⑪ 命令を補修せよ
- ⑫ 自分自身を知れ、自分らしくあれ
- ⑬ 率先垂範せよ
- ⑭ 自分も動くが、部下も動かせよ

## 8 男の修行

階級、指揮命令系統が厳正で、狭い艦内で挙艦一致して任務を達成するために

海上自衛隊で旧日本海軍から伝わる人生訓として良く引用される「男の修行」を紹介し  
ます。





## 9 海軍士官である前に紳士たれ



上の写真は海上自衛隊の初任幹部の遠洋練習航海の出港行事(東京晴海埠頭)の写真です。

「海軍士官である前に紳士たれ」という教えは防衛大学校時代も江田島の幹部候補生学校時代にも良く教育されました。

この教えが生まれたのは明治政府が新たに日本海軍を建設し、士官養成の海軍兵学寮(後の海軍兵学校)の教育体系を整備する過程でイギリス海軍顧問団により指導されたのが始まりです。

イギリスの海軍顧問団はアーチボルド・ルシアス・ダグラス少佐はじめ総勢34名で、明治6年7月27日に海軍兵学寮に到着しました。

このイギリス海軍顧問団来日を契機として海軍兵学寮の教育は一新され、ダグラスは母国イギリスのパブリック・スクール(上流家庭の子弟を教育する全寮制の私立中・高等学校で、イートン校がもっとも有名)や、ダートマス海軍兵学校で体得した「躰・マナー」を日本海軍に取り入れようとした。

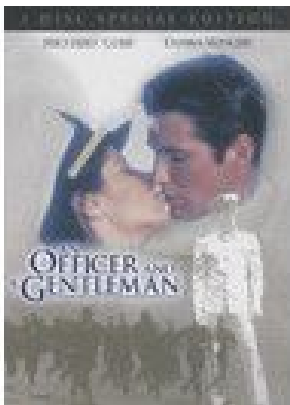
その第一は「紳士たれ」で、海軍士官である前に、紳士であれというイギリス流の紳士教育が始まったと言われていいます。

海軍兵学校は大東亜戦争終戦の昭和20年8月に廃校となりましたが、後に創設された江田島の幹部候補生学校にもその教育精神は受け継がれております。

また、この教えは戦後8年後に創設された防衛大学校に引き継がれました。

防衛大学校の初代榎智雄校長はイートン校からケンブリッジ大学に学んだ体験や井上成美海軍兵学校校長の進言を受けて、「立派な自衛官は立派な社会人でなければならない」として引き継がれたと言われていいます。

過去に米海軍士官候補生と町工場の女性の恋愛物語の映画「愛と青春の旅立ち」がありました。



原題は「an officer and a gentleman」であり、まさに「海軍士官であるまえに紳士たれ」という題名です。

アナポリス海軍兵学校にもその精神は継承されており、ジョン・ポール・ジョーンズ提督の教えとして以下の教えが残っています。

It is by no means enough that an officer of the Navy should be a capable mariner ... He should be as well a gentleman of liberal education, refined manners, punctilious courtesy, and the nicest sense of personal honor.

John Paul Jones

明治政府が海軍を建設する際に最も重視したのは人材の養成です。

このことは、海軍兵学寮の初代兵学頭(校長)の川村純義大丞(大佐)が回想談で次のように述べておられます。

「確か明治4年でした。大政官でもしきりに海軍を拡張したい、ことに天皇陛下の篤い思召もありました。わたくしはこの時に「軍艦は金さえあればいつでも買い得られますが、人物はそう一概にはできません。ゆえに海軍士官の養成を先にし、いつでも数艘の軍艦を指揮操縦する人物を養成しておきたい。陸軍の方は昔の士族でも事が足りえようが、海軍は古来船乗りと称して常に世人に軽蔑されていますから、海軍士官の養成は目下の急務でありましょう」。

また、海軍の拡張も、なかなか一朝一夕には行われうるものではありません。学校を巢立って5年、実地研究が10年、都合15年を期してやや見るべき海軍になりましょう』と申し上げておいたが、これからちょうど23年目に日清戦争になりました」。

また、明治天皇は明治7年1月9日の海軍事始めの式典で、ダグラス少佐らに「朕いま汝に偶会し、汝ら来国以来当学寮の教授にもっとも勉励せしを満足す。なお、汝の尽力によりて海軍の一大進歩を得るを望む」との勅語を賜っていることから、海軍が生徒教育にいかに大きな関心を持っていたかが理解できます。

## 10 「初級士官心得<抜粋>

海上自衛隊には旧日本海軍から引き継いでいる初級士官心得が数多くありますが、ここでは代表的な教えを抜粋して紹介します。

### 1 熱と意気を持ち、純真であれ

初級士官は、一艦の軍規風紀・元気の根源であることを自覚し、青年らしい純真さと若々しさの中に、熱と意気を失わず、勤務に精励せよ。

### 2 常に修養に努めよ

常に自啓自発に努め、士官としての品位を保ち、清廉潔白の風を養い、厳正な態度動作を心掛け、公正無私を念とし、功利打算を脱却することに努めよ。

### 3 広量(ひろしりょう)大度(だいで)で常に快活であれ

狭量は艦(隊)の統制を乱し、陰鬱は士気を沮喪(そそう)させる。忙しい艦(隊)の中にも伸びのびした気分を漂わす様注意せよ。日常は細心でなければならないが、コセコセすることは禁物である。

### 4 礼儀正しく、敬礼は厳格であれ

厳格な敬礼は、規律の第一歩であり、正しい秩序は礼儀によって保たれる。初級士官は常に謙虚な心構えで上司及び同僚に対し、親しい中にも礼儀を失わず、上下一致の源泉となる様努力せよ。

### 5 旺盛な責任観念を持つ

旺盛な責任感を持つことは、艦(隊)務の遂行上、第一の要素である。

責任観念は、自己の職務に対する誇りと、その本文を全うしようとする心構えから生まれる。一つの命令を下し、あるいは命令を伝達しようとする場合、その遂行を最後まで見届ける必要がある。

このようにして、はじめてその責任を全うしたものといえるのである。

### 6 進んで難事に当り、常に縁の下の力持ちとなれ

艦(隊)内各部の配置及び諸作業は、実に千差万別である。

各自がその配置において、それぞれ全能力を発揮することによって、全艦の全能力を発揮できるのである。

これが為には私慾にとらわれることなく、素直に物を考え、正しく物を見て、どんなに苦しい立場におかれても、すすんで難事に当る覚悟と縁の下の力持ちになるという犠牲的精神を持たねばならない。

### 7 日常座臥(ざが)、研鎖(けんさ)に努めよ

日常の艦(隊)務そのものが勉強であることを銘記し、忙しい時程自分の修養ができると

考え、常に寸暇を利用して、自己研鑽の資とすべきである。

日常研鑽の資料・成果などは、常に整理して記録にとどめ、後日の参考にするがよい。

何事によらず、一事に通曉徹底し、第一人者となる心構えで努力すれば、ついには万般に通ずることができる。

失敗の多くは、得意慢心の時に生ずる。艦（隊）務にも多少慣れて、自己の力量に自信を持つ頃になると、ともすれば先輩の思慮がかえって愚かしく見える時がある。

これこそ慢心の危機に臨んだ証拠であり、最も慎むべきときである。かかる時は、よく先輩の意図の理解に努めると共に、進んでその教えを乞う、謙虚にして熱心な態度が必要である。決して人を侮ったり、軽卒に批判すべきではない。

一日に30分でよいから読書する習性をつけ、判断力の涵養に努めなければならない。研究会や講話にはできるだけ出席せよ。教養を高めるためには、単に専門分野をのぞいているだけでは不可である。

平素、研究テーマを持ち、その研究の成果をまとめ、後に気づいた点は追加訂正しておく習慣をつけておけば、物事に対する思考力の涵養に役立つばかりでなく時に思わぬ貴重な資料となる。

## 8 信ずるところを断行せよ

事象の千変万化する海上生活においては、熟慮断行の余裕のない事が多い。

日常研鑽によって得た信念にもとづいて、迅速果敢に決断をせよ、また如何なる場合にも、士官たる者は率先垂範が必要であり、躊躇(ちゅうちよ)逡巡(しゅんじゅん)はますます、消極的気分を助長させる。

信ずる処を断行して経験を深めよ。

## 9 報告はマメに行なえ

上級者は常に下級者のすべてをみているわけではないが、それらの行為に関して全責任を負っている。

従って上級者は下級者の些細な行動まで十分に把握しておく必要がある。

何か起ったら必ず上官に報告せよ、また作業が順調に進んでいる時でも「異常なし」と云うことを報告せねばならない。

## 10 骨を惜しむな

乗艦(赴任)当時はさほどでもないが、少し馴れてくると、とかく骨惜しみする様になる。

一度、骨惜しみや不精をすると、それが習性となり容易に抜けきらないものである。身体の汚れるのを忌避する様ではおしまいである。

## 11 自身で問題を解決せよ

ある問題に遭遇したならば、その事が上官の裁決を必要とする場合でも、できるだけ情報を集めて、自身で考えた最良の手段を示す必要がある。

何か事が起きた場合、みずから考える事をせずして「どうしたらよいでしょうか」等と伺いをたてる者があるが、その様な士官は、将来重い職責を課せられた時、適切な判断を下すことが出来ない。

## 12 命令は忠実に、その実施は拙速・確実であれ

上司から調査又は立案等を命ぜられた場合は、すぐ実施せよ。

「明日にてなさん」は、禁物なり。

上司の希望であっても、命令と考えて実行せねばならぬものがある。よく上司の意のあるところを察知する努力を欠いてはならない。

上司には誠実な尊敬をもって接すべきである。意見の相異があれば卒直に述べて教えを請うべきである。部下の前で上司の悪口を云う様な事は、天に向って唾をするにひとしい。深くいましめるべきである。

## 13 船乗りらしくあれ

シーマンシップとは、船乗りとして常に持たねはならぬ心構えとわきまえて、日常これを実践することが大切である。

昔から「スマートで目先がきいて凡帳面、負けじ魂これぞ船乗り」といわれているが、これをそのまま実行すれば良いのであり、船乗りとして欠くことのできない能力の養成と共に、絶えず心掛けねばならないことである。

## 14 技術に対する関心を深めよ

用兵者は、とかく用兵術の研鑽のみにとらわれ、技術への関心、研究をおろそかにしがちである。与えられた兵器、計器をして最高度に能力を発揮させる為には、そのすべてを詳細に知らねばならない。さらに兵器、計器の進歩には用兵者の一層の理解協力が必要である。

## 15 回覧類は熟読せよ

回覧類は必ず目を通して、必要なところはメモして置け、これをよくみていないが為に、当直勤務に間違いを生じたり、大切な書類の提出期日をあやまり、将来勤務上必要な時の用に立たなくなったりすることがある。

## 16 小言をいわれるうちが花である。

初級士官時代は新しい経験の連続である。失敗をおそれ、また上司に叱られることや部下や同僚に笑われることなどを恥かしく思うような態度では、遂には消極の淵にはまり込ん

で任務が全うできなくなってしまう。

何事にも意気と熱で積極的に体当たりせよ。

これによって得た教訓は将来の勤務を全うさせる、かけがえのない力となる。

青年将校が積極性を失うに至れば、青年将校たるの真価を失ったと云うべきである。

留意すべきは失敗後、其の原因状況その他充分研究し、此のことに關しては以後再び繰り返すことなく完全なる自分の知識とすることは更に肝要な事である。

#### 17 良き当直士官たれ

当直に立つときは、その責任の重大性を自覚し、万事手際よくさばき、ミスなく処理に当れ。当直中、何事があっても沈着果敢に処する為には、あらゆる状況を想定した腹案を持っていることが肝要である。

#### 18 デアル、ラシカレ主義で行け

少尉は少尉である。中尉は中尉である。何事につけても分相応、士官は士官らしくあれ。

#### 19 常に整理整頓を心がけよ

すべてあるべき物があるべき時に、あるべき所に、あるべき状態でスタンバイ（用意）しておくこと。これが戦闘即応の大切な要素である。

#### 20 五分前の精神を堅持せよ

日本の社会では、集合時刻などに遅れることを、何とも思わぬ風習が根強く残っている。日常の諸作業についてだけでなく、公務以外の集合についても、「五分前」を厳守するとともに、引きあげもあっさりしているのがよい。人は艦を待つも、艦は人を待たず、である。

#### 21 公私の別を明らかにせよ

物品については、公用の便箋、封筒、鉛筆などのわずかなものでも、私用に供してはならない。

また、部下に私用を頼む場合は、その程度を充分考えて、部下に無理を強いたり、部下の貴重な時間を奪ったりするようなことが、かりそめにもあってはならない。

#### 22 他人の依頼には快く応ずる心がけを持て

依頼とは、相手の好意に依存するものである。上級者といえども強要することはできない。

しかし、下級者は上級者のみならず、同僚などの依頼に対しては、職務上差し支えない限り、誠意を以て応じるのが礼である。

人にしてやったことは片っぱしから忘れ、ひとからして貰ったことはいつ迄も覚えている。

### 23 物事にけじめをつけよ

当直と非番の区別を判然とさせ、非番のときには努めて緊張をほぐし、当直の場合は全責任をもって、当面の任務の遂行にあたるなど、時間的にも空間的にもけじめをつけることが大切である。

当直の場合は、出来るだけ非番の人間の仕事も処理してやるように努めるべきである。

### 24 常に部下と共にあれ

いかなる仕事を命じても、必ずその終始を監督し、いわゆる放任主義に陥ってはならない。特に苦しい作業などの場合には、必ず最後まで現場にとどまり、仕事の状況によっては、風呂や夜食を用意することを考えてやれ。

### 25 部下の指導には寛厳よろしきを得よ

部下を指導するにあたり、あまりに厳格に過ぎてはならない。

さればとて、寛にすぎて放任に陥ってもならない。

艦をまっすぐに「宜候(ヨーソロ)」にもっていくためには、舵の取りっぱなしではダメで、「あて舵」「もどし舵」の呼吸が大事である。

部下に悪いところがあれば、その場で遠慮なく注意せよ。

しかし、叱る場合には、場所と相手を見てやれ。

下士官を兵の前で叱るとか、正直な心の水兵をひどい言葉で叱りつけることなどは、百害あって一利なき行為である。

### 26 功は部下に譲り、部下の過ちは自ら負う

「先憂後楽」とは味わうべき言であり、部下統御の機微なる心理もかかる処に在る。

### 27 ワングランスで評価するな

誰にも長所あり短所あり、長所さえみていればどんな人でも悪く見えない。

雅量を持って、先ず短所を探すより先に長所を見出すに努める事が肝要、賞を先にし、罰を後にするは古来の名訓なり。

### 28 名前を覚えよ

「オイ」とかいうのは下士官兵の人格を無視した呼び方である。

記憶法は色々あるが、着任後早い時機に数名宛呼び、一人一人につき、家庭、特技等一般身上につき聴くことも一法である。

### 29 部下の能力を確認せよ

一等水兵に下士官の仕事を命じ、その結果が不満足だとして叱るのは無理である。



自分の考え、或は才能を以て部下を同程度に見ることは禁物、その能力相当の仕事を命ぜよ。

但し、事ある時の為の訓練にやや上級の仕事を与え之を訓練することは大いに必要なことである。

### 30 短絡（ショートサーキット）を慎め

何をやるにも、非常の場合をのぞいては、必ず順序を経てやらないと、艦（隊）の秩序が破れ、統制の乱れるもととなる。

### 31 感情に訴える様な部下指導は避けよ

いわゆる、親分、子分的な関係をつくったり、自分の好みに合った部下をつくったりすることは好ましくない。

将来、誰の下についても、真面目に勤務する良い部下をつくるように心がけよ。

### 32 率先垂範の実を示せ

部下を率いるときは、常に衆に先んじて難事にあたる心構えがなければならない。

また、自分が出来ないからといって、部下に遠慮、気兼ねをしたり、部下の機嫌を取ったりするようなことは禁物である。

### 33 テーブルマナーは一通り心得ておけ

海外に出ることの多い海軍士官は、一人一人が「外交官」としての自覚と矜持(きょうじ)を持たなければならない。

外国語の習得はもとより、食卓における作法、食卓での話題についても、水準以上のものを身につけていなければならない。

### 34 上陸して飲食や宿泊する時は、一流の店を選べ

海軍士官は品位を重んずる「種族」である。

あまり下品な所に入出入して、酒色の上などで士官たるの品位を失し、体面を汚すような事があれば、海軍士官全体の体面にかかわる重大事である。

### 35 部下指導の基礎は至誠なり

至誠を根本とし、熱と意気とを以て国家保護の大任を担当する干城を築造する事に心懸けよ。

---

■免責事項

---

本レポートでご紹介する内容は、個人の経験と分析の結果、安全かつ優良な情報をまとめたものですが、必ずしもあなたの利益を保証するものではありません。本書の内容により、いかなる損害が発生しましても一切の責任を負いません。本レポートをダウンロードした時点で、あなたはこれに同意したものとします。

---

■フリーWEB塾「郷什塾」関連サイト公開！

---

フリーWEBs 塾「郷什塾」の関連サイトを紹介します。是非、ご訪問下さい。↓  
フリーWEB 塾「郷什塾」HP ⇒ <http://gozyu.com>  
FC2 ブログ「定年憂国親父のひとりごと」 ⇒ <http://gozyu.blog106.fc2.com/>  
フリーWEB 塾「郷什塾」ネットビジネス基礎講座オフィシャルブログ  
⇒ <http://ameblo.jp/gozyuzyuku/>

---

---

フリーWEB 塾「郷什塾」の理念に基づき、より多くの日本人特に若者にお金を掛けずにホームページの作成やネットビジネスの手法を理解し、現代の IT 社会において幅広く活躍してもらうことを目的としてネットビジネス基礎講座を開始し、相互スキル向上のためのコミュニティ形成のため、メルマガの発行を始めました。

是非、こちら↓からご登録をお願いします。

⇒ <http://bit.ly/1eDacYc>

---

---

【発行】フリーWEB 塾「郷什塾」塾長

【郷什塾】<http://gozyu.com>

【ブログ】<http://gozyu.blog106.fc2.com/>

【お問い合わせ】[info@gozyu.com](mailto:info@gozyu.com)

---

---